

17 千葉県／村井 正雄(82歳)

亡き妻を偲んで

妻が逝去して既に六カ月になる。

私の目の前で突然倒れて、そのまま帰らぬ妻となった。

妻との出会いは、私が中学校2年の頃であった。

私たちは従妹同士で、よく妻の家に遊びに行った。

当時、私の友達と妻の友達も年中妻の家に集まり

遊んだのであった。

私がC高に通い、一つ下の妻がC二高に通う頃は、

私は毎朝、彼女の家に行き、連れだつて学校に

行ったものである。

MN高の学生や、C高の学生も妻に目をつけていたが、

村井がいるからと、誰も手出しをしなかった。

当時、私はC高の応援団長をしていて、その頃は番長と

皆が一目おいていた。

又、妻の家族も私の家族も当然、その交際を認めていて、

いつか二人が一緒になるだろう、と思っていた。

その間二人は、互いに手紙のやりとりをしていたのは

当然のことで 中学生の時から交際が、そのまま結婚に

結びついて いった。

三人の子供に恵まれ、楽しい家庭であったが、突然の妻の

死を目前にして 今でもどこかで生きているのではないかと、

毎日、朝、昼、夜と仏壇の妻の位牌と、写真に手を合わせ

線香をたむけている。

八十八才の祝いを、二人で一緒にしようという夢は消えて

しまった。

今の私は、ただただ妻の写真に手を合わせ、いろいろ

語りかけているだけである。

妻はどこに行ってしまったのだろう。

終